

摂食障害傾向と潜在的態度：GNAT による潜在的態度の測定

広島国際大学大学院総合人間科学研究科

大月 友

広島国際大学人間環境学部

杉山 雅彦

Implicit Attitude and Eating Disorders : Measuring implicit attitude in GNAT

Tomu Ohtsuki*, Masahiko Sugiyama**

*Graduate School of Integrated Human Sciences studies, Hiroshima International University

**Faculty of Human and Social Environment, Hiroshima International University

本研究の目的は、Ohtsuki & Kamimura (2004) の測定ツールを GNAT に改良し、摂食障害傾向の高い準臨床群の潜在的態度の検討を行うことであった。そのため、Ohtsuki & Kamimura (2004) の基準点を用いて女子大学生を摂食障害傾向高群（準臨床群）と低群に群分けし、実験を実施した。実験に用いられる GNAT 課題は 3 種類用意され、食事に対する潜在的態度を測定するための FOOD-GNAT、体型や体重に対する BODY-GNAT、自己に対する SELF-GNAT であった。さらに、体型や体重に対する顕在的な満足度の測定や信念尺度を実施した。各 GNAT 課題の反応潜時と誤反応数に対して ED 傾向×条件の分散分析を行った結果、FOOD-GNAT の誤反応数において交互作用が認められ、高群は低群よりも否定的な評価との連合が有意に強いことが確認された。また、同様に SELF-GNAT の誤反応数においても否定的な評価との連合が強い傾向にあると確認された。これらの結果から、摂食障害に特有な潜在的態度や GNAT パラダイムの測定ツールとしての有効性などが考察された。

Key words : 摂食障害, 潜在的態度, Go/No-go Association Task, 認知行動モデル

問題と目的

様々な精神疾患の症状形成や維持には、特定の刺激事態に対する非機能的な認知が影響を与えていることが指摘されている。そして、近年、認知や情動、行動（行為）といった変数を用いて、各疾患を包括的に理解する認知行動モデルが数多く提唱され、それに基づいた有効な援助が行われている。これまで、いわゆる認知という変数は、質問紙法を中心とした個人の内省に頼る測定法により研究が進められてきた (Blankstein & Segal, 2000)。しかし、自動的に賦活される信念や態度、注意、連想といった認知的変数

は、意識的なレベルの変数を測定する質問紙尺度のみでは測定や理解が困難であるといった指摘もなされている (De Houwer, 2002)。そのため、近年では、認知情報処理の過程における注意や記憶、連想といった自動的な認知処理も認知的変数として扱われ、疾患の包括的な理解のため認知行動モデルの中に組み込まれている (Beck & Clark, 1996)。

ところで、このような特定の刺激の処理方略の個人差は、各個人の経験や学習によって体制化された認知構造が影響を与えると考えられている。このような認知構造が客観的に測定されれば、新たな包括的モデルの構築や介入技法の開発、治療評価システムの開発、

などに貢献することが予想される。このような視点に立つと、最新の認知測定パラダイムである Implicit Association Test (IAT: Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) により測定される、個人内の潜在的態度という認知構造は非常に興味深いものと思われる。この潜在的態度とは、社会的対象に対する感情・思考・好意を媒介する、内省的に特定できない（あるいは正確に特定できない）過去の経験の痕跡として定義されており (Greenwald & Banaji, 1995), 特定の刺激事態が個人にどのように機能するかを示すものと考えられる。

この IAT では、潜在的態度として、過去の経験によって自動化されている知識の概念間の連合を測ることを目的としており、個人の記憶内の認知構造を測定する認知課題と考えられている (詳細は Greenwald et al., 1998 を参照)。近年、IAT は各種情動障害を対象とした精神病理の研究ツールとして応用され始めている (De Houwer, 2002 ; de Jong, 2002 ; de Jong, Pasman, Kindt, & van den Hout, 2001)。Ohtsuki & Kamimura (2004) は、この IAT パラダイムを摂食障害 (Eating Disorders: 以下 ED とする) 傾向の高い女子学生に対して実施し、ED に特有の潜在的態度の実験心理学的検討を試みている。Fairburn (1997) は、食事や体型、体重に関する独特な態度や価値観が、ED の症状形成や維持に大きく影響していると指摘している。また、松本・熊野・坂野・野添 (2001) は質問紙尺度を開発し、ED 傾向の高い人ほど食事や体型、体重に関する非機能的信念が強いことを明らかにしている。認知行動理論では、このような認知的変数が ED の中核精神病理として捉えられており、主要な治療ターゲットとされている (Garner & Blanch, 2002)。そのため、Ohtsuki & Kamimura (2004) では、食事と体型・体重に対してその潜在的態度の測定を試みている。この実験の結果から、ED 傾向の高い群は低い群と比較して、体型・体重に対してはより肯定的な側面との連合が強く、食事に対しては両群で有意な差が見られないことが明らかとなった。また、自己報告式の質問紙尺度の結果から非機能的信念が強いことが確認された。Ohtsuki & Kamimura (2004) はこれらの結果を、準臨床群と

しての被験者の潜在的態度を的確に測定していると指摘し、IAT パラダイムの精神疾患研究ツールとしての有用性を評価している。さらに、この IAT パラダイムの信頼性も確認されている (大月・神村・杉山, 2004)。

しかし、Ohtsuki & Kamimura (2004) や大月ら (2004) では、IAT で単一概念の潜在的態度を測定するには、その内容的妥当性に疑問が残ると指摘している。De Houwer (2002) も指摘するように、IAT には 2 つの標的カテゴリーがその方法論上不可欠であり、そこで測定される態度は 2 つの標的カテゴリーの相対的なものである。この問題を解決するために、Nosek & Banaji (2001) は単一概念の潜在的態度を測定するツールとして、Go/No-go Association Task (GNAT) を開発している。彼らは信号検出理論を応用し、IAT を単一概念測定用に改良した。この GNAT では、4 つのカテゴリーが用いられ、標的語 (標的概念) と妨害語が 1 つずつ、評価語が 2 つ (肯定語 / 否定語) である。そして、2 つの条件が用意され、一方は標的語と肯定語が提示された場合にボタンを押しそれ以外の単語には反応しない条件、もう一方は標的語と否定語が提示された場合にボタンを押しそれ以外の単語には反応しない条件であった。用意されている反応キーは IAT とは異なり 1 つである。そして、2 つの条件間の反応潜時の差と誤反応数が比較される。標的語が肯定語と組み合わせられた条件で反応潜時が短く誤反応数が少ない場合、その標的語 (標的概念) は肯定的な側面との連合が強いことを意味し、逆の場合はその逆を意味する。Nosek & Banaji (2001) では一連の実験を通して、GNAT が単一概念の潜在的態度を測定するツールとして有効であることを確認している。これらのことから、今後の潜在的態度研究において単一概念を測定する場合、GNAT のような専用の測度を用い、内容的妥当性の問題を克服していく必要があると思われる。

そこで本研究は、Ohtsuki & Kamimura (2004) の測定ツールを GNAT に改良し、ED 傾向の高い準臨床群の潜在的態度の検討を行うことを目的とする。また、測定する態度としてこれまでに多くの ED 研究 (Fairburn, 1997 ; Garner & Blanch, 2002 など) に

よって指摘されている自己に対する態度を加えて、食事、体型・体重、自己に対する潜在的態度を検討することとする。

方 法

1. 実験被験者

EAT-26 (Mukai, Crago, & Shisslak, 1994) をスクリーニング調査として女子大学生に実施し、同時に実験参加者の募集も行った。そして実験を承諾した学生の中から、Ohtsuki & Kamimura (2004) において 575 名の女子学生に対して実施された EAT-26 の結果を参考にし、平均 (54 点) 以上の得点獲得者を ED 傾向高群、平均以下の得点獲得者を ED 傾向低群として群わけを行った。その結果、ED 傾向高群として 12 名、ED 傾向低群として 14 名の被験者に実験を実施した。しかし、分析対象としたのは Ohtsuki & Kamimura (2004) と同様の基準とした。そのため、① EAT-26 が 62 点以上であった被験者を ED 傾向高群、44 点以下を ED 傾向低群、② BMI が 22 以下の平均体型より痩せている被験者、を満たす被験者を分析対象者とした。その結果、最終的な分析対象者は ED 傾向高群が 4 名、低群が 6 名となった。ただし、BODY-GNAT に関してはデータに不備のあった被験者を分析から除外したため、ED 傾向高群が 3 名、低群が 5 名となった。

2. 実験装置

課題の説明文、FOOD-GNAT、BODY-GNAT、SELF-GNAT の刺激単語および各 GNAT プログラムは、Carnegie-Mellon University で心理学実験のプログラミング用に開発された PsyScope (Cohen, Macwhinney, Flat, & Provost, 1993) によって作成した。教示、課題説明文、各 GNAT における刺激は、PsyScope (Cohen et al., 1993) および Apple 社製パーソナルコンピュータ Power Macintosh G4 を用いて、三菱社製 CRT ディスプレー (17 インチ) に呈示した。GNAT 課題におけるボタン押し反応の反応潜時は、New Micros 社製 PsyScope Button Box を用いて、1 ms 単位で計測した。

Table 1 GNAT 課題に用いられた刺激単語

カテゴリー	刺 激 語
食事語 (標的語)	ピザ 焼肉 パター パフェ から揚げ ぎょうざ たこ焼き お好み焼き チョコレート ショートケーキ
体型・体重語 (標的語)	お腹 ヒップ 太もも 二の腕 バスト 下腹部 下半身 スタイル ふくらはぎ プロポーション
文房具語 (妨害語)	万年筆 ノート 絵の具 色えんぴつ クリップ えんぴつ ファイル 消しゴム ボールペン セロテープ
自己関連語 (標的語)	日本人 大学生 人間環境学部 臨床心理学科 広島国際大学
自己無関連語 (妨害語)	小学生 中学生 政治経済学部 応用物理学科 県立千葉大学
肯定語 (評価語)	快い きれい 楽しい 美しい うれしい 好ましい 心地よい すばらしい 望ましい やさしい
否定語 (評価語)	汚い 苦しい 悲しい くだい つらい 切ない さびしい 心苦しい 気味悪い 情けない

3. 実験材料

1) FOOD-GNAT

FOOD-GNAT は、Ohtsuki & Kamimura (2004) の IAT 課題を参考に構成され、食事語 (標的語)、文房具語 (妨害語)、肯定語、否定語の 4 種類の刺激カテゴリー各 10 単語を刺激語として用いた (Table 1 参照)。2つの条件が用意され、一方は食事語と肯定語が提示された場合にボタンを押す条件 (肯定条件)、もう一方は食事語と否定語が提示された場合にボタンを押す条件 (否定条件) であった。各条件とも 40 試行を本試行として実施し、その前には 16 試行の練習をそれぞれ実施した。各条件の提示順序は、カウンターバランスをとった。

課題は、まず、各条件の最初に、反応するカテゴリーを指示する教示文がディスプレイに呈示された。次に各試行は、最初に画面中央に注視点 (*) を 0.5 秒間呈示し、注視点が消えた直後に特定のカテゴリーの単語を 1 語ランダムな順序で画面中央に呈示した。被験者はこの呈示された単語のカテゴリーをできるだけ速く判断し、反応する (ボタンを押す) かしないかを決定するよう教示された。また、刺激語は 0.8 秒間しか呈示されないため、それまでに判断するよう求められた。試行間間隔は 0.5 秒とした。

2) BODY-GNAT

FOOD-GNAT の食事語を体型・体重語に変え (Table1 参照), その他は同様の設定で構成した GNAT 課題であった。

3) SELF-GNAT

FOOD-GNAT の食事語を被験者自身に関連する単語に, 文房具語を被験者自身に関連しない単語に変え, その他は同様の設定で構成した GNAT 課題であった。自己に対する潜在的態度を測定する方法は, 刺激語として代名詞を用いる Simple GNAT と被験者の個性記述的な単語を用いる Idiographic GNAT の 2 種類あるが (潮村・村上・小林, 2003), 本実験では後者の方法を用いた。全被験者に共通する個性記述的な単語として, 所属大学や学科, 性別 (女性) などの 5 単語を選定し, 自身に関連しない単語はそれらの 5 単語の内容を変更したもの (例: 大学生→中学生) であった (Table1 参照)。

4) 実験後アンケート

アンケートは, ① BMI に関する質問, ② ダイエット (減量を目的とした食事制限あるいは運動の実施) を実行しているかどうかの質問, ③ VAS (Visual Analog Scale) による体型・体重の満足度の評価 (Thompson, 1996), ④ 9 種類のシルエットの描かれた図から現実と理想の体型に近いものを評価させる Contour Drawing Rating Scale (CDRS: Thompson, 1996), ⑤ 体型や食事に関する信念尺度 (BSDS: 松本ら, 2001), で構成された。ただし, BMI の記入は強制せず, 記入したくない場合は答えなくても構わないということを紙面と口頭で説明した。

4. 手続き

実験は個別に行われた。被験者は実験室に入室後, 刺激呈示用ディスプレイから約 80cm 離れた椅子に座らされた。その後, 「この実験は単語のカテゴリーを判断する実験です」と教示し, 実験を開始した。3 つの GNAT の実施順序は被験者間でカウンターバランスされた。GNAT に関するすべての教示は, コンピュータディスプレイ上に呈示された。GNAT 実施後, 実験後アンケートに記入を求めた。

5. 分析方法

GNAT 課題で測定された反応潜時は, Nosek & Banaji (2001) の実験 5 を参考に, 正反応であった試行のみの反応潜時の平均を各条件で算出し, ED 傾向 2 (高/低: 被験者間) × 条件 2 (肯定条件/否定条件: 被験者内) の 2 要因の分散分析によって分析を行った。ここで, 反応潜時が短い場合その条件内の標的語と評価語 (肯定語/否定語) の連合が強いことを意味し, 長い場合ではその逆を意味する。GNAT 課題における誤反応数に関しては, de Jong et al. (2001) の IAT の分析方法を参考に, ED 傾向 2 (高/低: 被験者間) × 条件 2 (肯定条件/否定条件: 被験者内) の 2 要因の分散分析によって分析を行った。ここで, 誤反応数が少ない (あるいはない) 場合その条件内の標的語と評価語 (肯定語/否定語) の連合が強いことを意味し, 多い場合はその逆を意味する。

結 果

1. FOOD-GNAT の実験結果

Fig.1 は各群の FOOD-GNAT の条件ごとの反応潜時の平均を示したものである。反応潜時に関して, ED 傾向と条件を要因とした 2 × 2 の分散分析を行ったところ, 条件の主効果が有意であった [$F(1, 8) = 7.39, p < .05$]。よって, 反応潜時からは両群とも食事に関しては肯定的な側面と強く連合しており, 群間の差は認められなかった。Fig.2 は各群の FOOD-GNAT の条件ごとの誤反応数の平均を示したもので

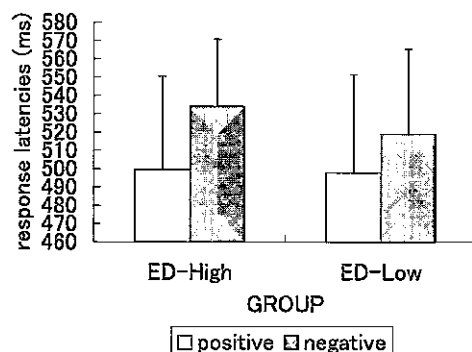


Fig. 1 FOOD-GNAT における反応潜時の平均

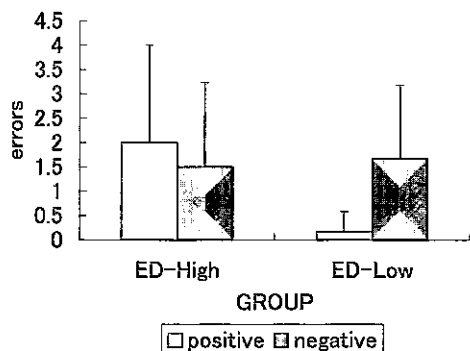


Fig. 2 FOOD-GNAT におけるエラー数の平均

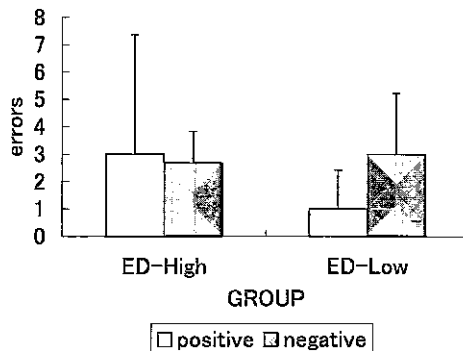


Fig. 4 BODY-GNAT におけるエラー数の平均

ある。2×2の分散分析を行ったところ、ED 傾向×条件の交互作用が確認された [$F(1, 8) = 9.03$, $p < .05$]。このことから、ED 傾向高群は低群よりも食事の肯定的な側面との連合が弱いことが示された。

2. BODY-GNAT の実験結果

BODY-GNAT の反応潜時に関する結果を Fig.3 に示す。ED 傾向と条件を要因とした2×2の分散分析を行ったところ、有意差は確認されなかった。BODY-GNAT の誤反応数に関する結果を Fig.4 に示す。ED 傾向と条件を要因とした2×2の分散分析を行ったところ、有意差は確認されなかった。これらの結果より、体型や体重に対する潜在的態度に関して、両群で明確な差がないことが示された。

3. SELF-GNAT の実験結果

SELF-GNAT の反応潜時に関する結果を Fig.5 に示す。ED 傾向と条件を要因とした2×2の分散分析を

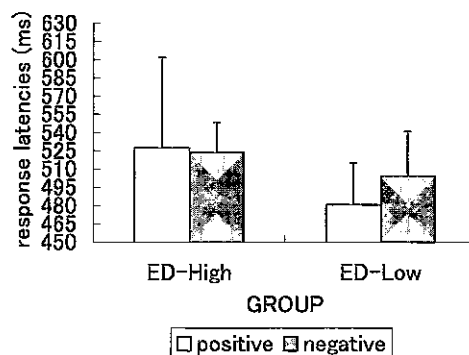


Fig. 5 SELF-GNAT における反応潜時の平均

行ったところ、有意差は確認されなかった。一方、Fig.6 は BODY-GNAT の誤反応数に関する結果を示したものである。ED 傾向と条件を要因とした2×2の分散分析を行ったところ、ED 傾向×条件の交互作

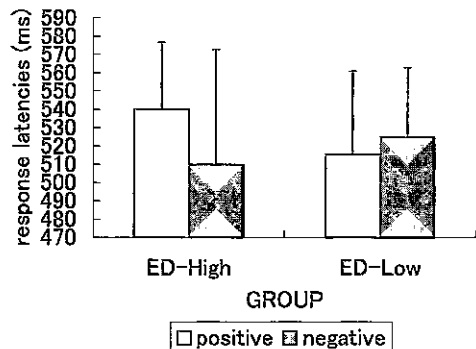


Fig. 3 BODY-GNAT における反応潜時の平均

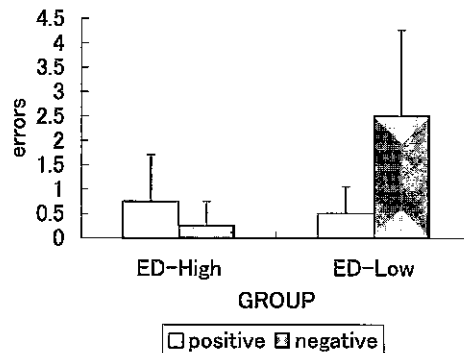


Fig. 6 SELF-GNAT におけるエラー数の平均

Table 2 EAT-26と実験後アンケートの結果

	ED傾向高群	ED傾向低群	t 値
EAT-26	72.00 (7.53)	34.83 (5.31)	9.23**
BMI	21.30 (0.70)	19.38 (0.70)	4.24**
ダイエット者数	1	0	—
体型満足度 (VAS)	29.25(11.52)	52.33(20.63)	2.01†
体重満足度 (VAS)	20.00 (3.56)	36.33(14.56)	2.16†
現実体型 (CDRS)	6.25 (0.50)	4.83 (0.75)	3.27*
理想体型 (CDRS)	3.25 (0.50)	4.17 (0.75)	2.12†
体型不満度	3.00 (0.00)	0.67 (1.03)	4.42**
BSDS	79.75 (3.30)	72.33 (7.71)	1.78

() 内は標準偏差 ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

用が有意傾向であった [$F(1, 8) = 4.80, p = .06$]。このことから、ED 傾向高群は低群よりも自己が否定的な側面とより強く連合していることが示唆された。

4. その他の指標に関する結果

Table2 は各群の EAT-26 得点, BMI 値, ダイエット実施者数, 体型に対する満足度 (VAS), 体重に対する満足度 (VAS), 現実体型 (CDRS), 理想体型 (CDRS), 体型に対する不満度, BSDS 得点, を示したものである。ここで, VAS 得点は不満を 0 点 (0cm), 満足を 100 点 (10cm) として点数化してある。また, 体型に対する不満度は, CDRS で示された現実体型と理想体型がどの程度離れているかを示すもので, 数値が大きいほど不満が強いことを意味する (Thompson, 1996)。ダイエット実施者数に関しては Fisher の直接確率計算を, それ以外の指標に関しては t 検定を実施した。その結果, EAT-26 得点, CDRS による現実体型, 不満度で群間の有意差が確認された。また, VAS による体型に対する満足度と体重に対する満足度, CDRS による理想体型において群間の有意傾向が認められた。BSDS 得点とダイエット実施者数に関しては, 群間に差は認められなかった。これらの結果から, 全体的に ED 傾向高群は低群と比較して, 自らの体型や体重に対して顕在的に否定的な評価をしていることが確認された。しかし, 一方で BMI に有意差が確認された。

考 察

1. ED 傾向と潜在的態度に関して

本研究は, ED 傾向の高い女子学生群と低い女子学

生群に対し, 最新の認知測定パラダイムである GNAT を用いて, 食事, 体型・体重, 自己に対する潜在的態度の測定を行った。

まず食事に対する潜在的態度であるが, 反応潜時の分析では条件の主効果が有意であり, Fig.1 が示すように食事は両群とも肯定的な評価と強く連合していることが伺える。しかし, 誤反応数の分析からは, Fig.2 に示されているように, ED 傾向高群は肯定条件において否定条件よりも誤反応数が多いのに対して, 低群はその逆であった。このことより, ED 傾向高群においては食事と肯定的評価との連合が強くないことが示唆され, 食事に関しての否定的な側面 (太るなど) との結びつきがあるものと推測される。これは, ED 傾向の特徴として O'Mahony & Hollwey (1995) や Fairburn (1997) が指摘している, 食事に対する独特の態度やこだわりを支持する結果であるといえよう。

一方, 体型・体重に関しては, 反応潜時と誤反応数ともに群間の統計的な有意差は確認されなかった。しかし, Fig.2 と Fig.3 が示すように ED 傾向高群においては否定条件の方で反応潜時が短く, 誤反応数が少ないのに対して, 低群においては肯定条件の方がそのようになっている。このことは, ED 傾向高群は低群よりも, 体型や体重に関して否定的な評価との結びつきが強いことを示唆するものと考えられる。多くの先行研究が ED の特徴として示唆する体型や体重に対する不満感が潜在的にも示されているものと推測される。しかし, この結果は統計的な有意差は確認されておらず, 明確な言及はできない。また, 本研究の結果は, Ohtsuki & Kamimura (2004) の実験結果と異なるものであった。これが IAT と GNAT の方法論上の違いによって生じたものであるか, それぞれが測定しているもののそのものが違うのか, 被験者の違いから生じたものかは現段階では定かではない。今後, 2つの方法論を被験者内要因とするなどして, 検討していく必要がある。

自己に関しては, 反応潜時では統計的な有意差は確認されなかったものの, 誤反応数において有意傾向が認められた。ED 傾向低群においては, 反応潜時が否定条件で長く, 誤反応数においても否定条件で多いこ

とから、潜在的に肯定的な自己評価であることが示されている。これは、多くの人が潜在的に自己に肯定的な評価を下しているという、潮村ら（2003）の指摘と同様のものである。一方ED傾向高群の結果は、その逆を示すもので、潜在的に否定的な評価、あるいは、肯定的ではない評価を示唆するものであった。これはFairburn（1997）などの多くの先行研究がEDの特徴として指摘している、低い自己評価を示すものと考えられる。一般的に人は自己に対して潜在的に肯定的な態度を抱くことが確認されていることから（潮村ら、2003）、この自己に関する結果は臨床心理学的な問題を抱える個人において重要な意味を持つということを示唆するものであろう。しかしながら、これはあくまでも有意傾向であり、明確な差異であると断言できるものではないため、今後検討されるべきである。

2. ED傾向とその他の指標に関して

本研究では、GNAT課題の他に質問紙法を用いて、体型や体重に対する顕在的な評価、および、感じ方を測定している。満足度に関しては、体型も体重もED傾向高群が低群と比較して、より低く評価する傾向にあるといえる。これは、これまでの先行研究の結果を支持するものであり、EDの特徴として捉えられるものであろう。またCDRSの結果からは、高群は低群よりも自らの体型を太く感じていることが示されている。これは、ボディイメージの歪みとしてこれまで指摘されているEDの特徴（Thompson, 1996）を示しているものと思われる。しかし、実際のBMI値で本研究のED傾向高群と低群において有意な差が確認されており、歪んだ知覚によるものであるか、現実的な体型の違いであるかは明確ではない。今後は、BMI値の厳密な統制を行うことで、これらの検討を行う必要がある。

また、BSDSにより体型や食事に関する非機能的信念の測定を試みたが、両群において有意な差は確認されなかった。この結果から、本研究における被験者の顕在的な思考パターンは、群間で明確に差はない状態であったものと考えられる。しかし、異常食行動の程度を測定するEAT-26においては両群に明確な差が確認されている。今後は、質問紙尺度等で測定される

顕在的なレベルでの行動指標や認知指標と、GNAT等で測定される潜在的なレベルでの認知指標の関連性や非関連性に関する検討をさらに実施していく必要がある。

3. GNATに関して

本研究で確認されたGNATの特徴としては、誤反応数が各群の特徴を理解する上で重要な指標となったということであろう。これは、GNATでは反応に時間制限を設けていることに関連しているものと考えられる。IATではすべての刺激語に反応するように求めているため、反応するまでに時間制限を求めている。そのため、教示段階で可能な限り早く正確に反応するように求めているが、誤反応はあまり認められなかった。一方、本研究におけるGNATでは、800msという時間制限を設定しており、反応するよう指定されている刺激語が呈示された場合に、800ms以上反応しない時間があれば、その試行は誤反応としてカウントされることになる。実際、Nosek&Banaji（2002）は、GNATにおいて誤反応数は有用な情報であり、時間制限を設定することにより、より測度としての反応感度が上がることを指摘している。

しかし、反応潜時と誤反応数をどのように組み合わせる結果を理解していくべきかに関して、疑問が残る。たとえば、反応潜時の結果と誤反応数の結果で、潜在的態度の方向（肯定的/否定的）が逆を示す場合にどのように態度を理解するかは不明である。de Jong et al.（2001）では、IATでの反応潜時と誤反応数を個別に分析している。本研究の分析方法はこの方法を採用したものであるが、最善の方法であるかは議論の余地が残されているであろう。この点に関しては、Nosek&Banaji（2002）が新しい分析法を提案しており、今後の検討が期待される。

また、GNATの測度としての利点に関して、被験者の意図的操作が困難であるという点、内省が困難な潜在的態度を概念間の連合強度として客観的に測定可能であるという点、一般に普及しているパーソナルコンピュータさえあれば実施に時間もかからず特別な装備も不必要で経済的であるという点などが考えられる。このような潜在的な認知を測定することによって、治療の初期段階におけるクライアントの理解が促

進され、より有効な心理的援助の提供が可能となるであろう。また、問題が顕在化する前のスクリーニングテストとして応用することにより、効果的な予防措置へと結びつく可能性も考えられる。これらの点からも、GNATは新しいアセスメントツールとして非常に有用であると考えられる。しかしながら、GNATは研究がまだ少なく、IATのように信頼性と妥当性が十分に検討されているとはいえない状況であり、今後の研究が期待される。

4. 今後の課題

本研究には上述の問題点他にもいくつかの課題が残されている。まず、被験者の検査時の覚醒水準や空腹度の統制ができていないことである。GNATのようなms単位での測定を行う認知課題には、覚醒水準といった個人の内的な変数が遂行成績に影響を与えることが予測される。空腹度に関しては、食事制限によって空腹感を強めると食事に関する刺激に対して注意バイアスが生じることがこれまでに明らかになっている（Green & Rogers, 1993；Levy & van den Hout, 1993）。記憶内の認知構造を測定するGNATに空腹度が影響するかどうかは不明であるが、このような内的変数については検討していく必要があるであろう。

次に、本研究では被験者数が非常に少ないという問題がある。これは準臨床群の被験者の選定基準を厳密にすることにより、研究の臨床的な妥当性を高めるための手続きが大きく影響したものであった。しかし、そのことでサンプルサイズが少なくなり、統計処理の検定力が低くなるという結果に陥った。被験者群の統制を維持しつつも、統計処理に耐えうるサンプルサイズにしていくことが今後の課題であろう。

このようにいくつかの問題点は残されているものの、本研究の結果からGNATは精神疾患の研究ツールとして有用であることが示唆された。今後は、上述の課題を克服していくとともに、GNATの測度としての妥当性や信頼性に関する検討、潜在的態度をどのような疾患のモデルに組み込むことが妥当であるかの検討など、さらなる研究がなされることが望まれる。

文 献

- Beck, A. T., & Clark, D. A. 1997 An information processing model of anxiety : automatic and strategic processes. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 49-58.
- Blankstein, K. R., & Segal, Z. V. 2000 Cognitive assessment. Issue and methods. In K. S. Dobson (Ed.), *Handbook of cognitive behavioral therapy*. New York : Guilford Press. Pp.40-85.
- Cohen, J., Macwhinney, B., Flatt, M., & Provost, J. 1993 PsyScope : An interactive graphic system for designing and controlling experiments in the psychology laboratory using Macintosh computers. *Behavior Research Methods, Instruments, and computers*, 25, 257-271.
- De Houwer, J. 2002 The implicit association test as a tool for studying dysfunctional associations in psychopathology : strengths and limitations. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 33, 115-133.
- Fairburn, C. G. 伊豫雅臣 (訳) 2003 摂食障害 伊豫雅臣 (監訳) 認知行動療法の科学と実践 星和書店 Pp.157-191.
- (Fairburn, C. G. 1997 Eating disorders. In D. M. Clark, & C. G. Fairburn (Eds.), *Science and practice of cognitive behaviour therapy*. Oxford : Oxford University Press.)
- Garner, D. M., & Blanch, M. T. 2002 Cognitive behavioural treatment of eating disorders. In G. Simos (Ed.), *Cognitive behaviour therapy — A guide for the practicing clinician*. New York : Taylor & Francis. Pp.173-200.
- Green, M. W., & Rogers, P. J. 1993 Selective attention to food and body shape words in dieters and restrained nondieters. *International Journal of Eating Disorders*, 14, 515-517.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. 1995 Implicit Social Cognition : Attitudes, Self-esteem, and Stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.

- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. 1998 Measuring individual differences in implicit cognition : the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- de Jong, P. 2002 Implicit self-esteem and social anxiety : differential self-positivity effects in high and low anxiety individuals. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 501-508.
- de Jong, P., Pasman, W., Kindt, M., & van den Hout, M. A. 2001 A reaction time paradigm to assess (implicit) complaint-specific dysfunctional beliefs. *Behaviour Research and Therapy*, 39, 101-113.
- Levy, E. H., & van den Hout, M. A. 1993 Attentional bias for appetitive cues : effects of fasting in normal subjects. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, 21, 297-310.
- 松本聡子・熊野宏昭・坂野雄二・野添新一 2001 体型や食事に関する信念尺度作成の試み：摂食障害における偏った思考パターンを探る 心身医学, 41, 336-342.
- Mukai, T., Crago, M., & Shisslak, C. M. 1994 Eating attitudes and weight preoccupation among female high school students in japan. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 677-688.
- Nozok, B. A., & Banaji, M. R. 2001 The go/no-go association task. *Social Cognition*, 19, 625-664.
- Ohtsuki, T. & Kamimura, E. 2004 The Effect of Eating Disorders Tendency on Information Processing Biases in College Female : Measuring Dysfunctional Associations in Implicit Association Test. World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies 2004 Abstracts, 225.
- 大月 友・神村栄一・杉山雅彦 2004 女子学生の摂食障害傾向と連想バイアス—IAT (Implicit Association Test) を用いた実験心理学的アプローチとその信頼性・妥当性の検討— 日本行動療法学会第30回大会発表論文集, 256-257.
- O'Mahony, J. F., & Hollwey, S. 1995 The correlates of binge eating in two nonpatient samples. *Addictive Behaviors*, 20, 471-480.
- 潮村公弘・村上史朗・小林知博 2003 潜在的社会的認知研究の進展—IAT (Implicit Association Test) への招待— 信州大学人文学部人文科学論集, 37, 65-84.
- Thompson, J. K. 1996 Assessing body image disturbance : measures, methodology, and implementation. In J. K. Thompson (Ed), *Body image, eating disorders, and obesity. An integrative guide for assessment and treatment*. Washington, DC : American Psychological Association. Pp.49-82.

(受理日 2004年12月22日)